

ライフストーリーにおける考え方の枠組み — 児童養護施設経験者の語りのディスコース分析 —

糟屋 美千子
社会環境部門

Interpretive frameworks in a life story: A discourse analysis of the talk of a person who lived in an orphanage

Michiko KASUYA

School of Human Science and Environment,
University of Hyogo
1-1-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092 Japan

Abstract: This study analyzed the discourse of a person with experiences in an orphanage in order to identify his interpretive frameworks to understand the reality in his life. It examined the interpretive frameworks from three perspectives: 1) aspects of events given importance, 2) causal relationships formed in the events, and 3) attributes attached to the participants. The analysis initially showed that the theme of his talk was concerned with the non-existence of love in his life. However, further analysis of the talk found episodes of abundant love which he has received as well as given. The analysis suggests that by re-considering the interpretive frameworks of his life story from the three perspectives, it might be possible to look at the events from different viewpoints, and construct an alternative story to perceive the reality which pays attention to more positive sides of his life.

Keywords: discourse analysis, interpretive framework, life story, orphanage experience

1. はじめに

本研究は、児童養護施設経験者である A さんの語りをディスコース分析の手法で分析し、そのディスコースに表れている考え方、特に、A さんがどのように現実をとらえているかを明らかにすることを試みた。分析の過程で、A さんの語りは「愛する」ということがテーマになっていると考えられた。そこで、「愛する」という視点から A さんのディスコースを分析し、分析の結果明らかになった A さんの考え方の枠組みについて検討した。

本研究で分析手法として使用するディスコース分析は、言語を社会生活における重要な要素ととらえ、言語は人々の考え方を反映するだけでなく、人々の考え方を形作る働きをしているという立場に立って (Fairclough, 2003)、言語によりどのような考え方が作られているかを分析によって明らかにするものである。本研究では、

ディスコース分析で A さんの現実の見方を明らかにしたうえで、ものごとについての見方を作る時に重要な役割を果たす「重みづけ」「因果関係の設定」「人物の属性の付与」の 3 つの視点 (糟屋, 2012; 2014) から A さんの考え方の枠組みを検討した。

2. 分析手法

2.1 分析方法

本研究は、語りの分析手法として、質的データを扱う研究手法の 1 つであるディスコース分析を用いている。能智 (2011) によれば、質的データの分析は、分析において何を重視するかで、大きく、カテゴリー分析とシーケンス分析に分けることができる。カテゴリー分析は、「データをある程度短い部分に分けたり部分を要約したりしながら、データの概念化・カテゴリー化を進め」、

データを共通性によって抽象化することで理解を深める手法であり、心理学において質的分析法として使われることが比較的多い (p. 250)。能智 (2011) は、カテゴリ分析の代表例としてグラウンデッドセオリー・アプローチ、KJ 法を挙げている。

一方、シークエンス分析は、「語りはブロックのように分離可能な小部分の集まりというよりもむしろ、分かちがたい複雑なつながりを様々な方向にもつ織物 (テキスト)」であると考えられる。シークエンス分析には、ディスコース分析、会話分析、ナラティブ分析が含まれ、データに「様々な方向のつながりや関係を見出していこうとする点で共通している」(能智, 2011, p. 262)。

ディスコース分析の「ディスコース」とは、「言説」や「談話」と訳されることがあるが、基本的には「単語や文よりも大きな言葉のまとまり」を意味する (能智, 2011, p. 262)。しかし、それ以上に、言葉を「心を伝える透明な伝達手段」ではなく、人と人とのやり取りの中で「何かの働きをする」もの (鈴木, 2007, p. 61)、「他の要素と相互に密接に関係している、社会生活の一要素」(Fairclough, 2003, p. 3) としてとらえる用語である。ナラティブという語は、社会や文化によって形作られるという側面を見つづも、「語り手という個人との関係の中でとらえられがち」であるが、ディスコースという語が用いられる時は、「個人によって生み出されながら個人を作り上げ、さらには、社会や文化によって枠づけられながら社会や文化に影響を与える」という側面がより重視される (能智, 2011, p. 263)。

能智 (2011) は、ディスコース分析を行なう際の重要な点として、「データを何度も読み返して全体像を頭に入れるとともに、特徴的と思える部分をチェックすること」を挙げている (p. 264)。データを見るうえで特に注目されることが多いものとして、「そのデータがどのような現実のバージョンを提示しようとしているのか」や、「その提示はどのような文化的リソースに影響を受けているのか」や、「コミュニケーションの文脈の中でどのような行為や働きかけになっているのか」などを指摘している (p. 265)。すなわち、ディスコース分析においては、ディスコースが示すものごとの意味づけを明らかにすること、ディスコースの社会文化的背景にあるものを見ること、ディスコースの及ぼす影響を見ることなどが目指される。

また、鈴木 (2007) は、能智 (2011) と同様に、ディスコース分析を行なう際に、データを何度も繰り返し読むこと、そしてデータの中から直感的に引っかかる場所を探ることを重視している。そして、引っかかる場所や繰り返し現れることを探し、印をつけて、思いつい

たことを予備的な分析としてメモしていくことでパターンを見つけることを提案している。鈴木 (2007) によれば、この繰り返しデータを読むことで見つけようとしている「パターン」とは、手描きの不完全ないくつかの円を見て、そこに「完全な円を見ることに似ている」(p.158)。すなわち、パターンはデータの中にあるのではなく、データから分析者の「頭の中に作り上げる」もので、「抽象的な何か」であり、これがディスコース分析の非常に創造的なところであると言える (鈴木, 2007, p.158)。

本研究においては、能智 (2011) および鈴木 (2007) に従って、A さんの語りの原稿を何度も読み返し、全体の姿を頭に入れることにした。その都度、気になるところ、引っかかる場所、繰り返し現れる表現に下線を引くなど印をつけたり、頭に浮かんだことを余白にメモするなどしていった。何度も読んで、考えたことを十分にメモしたと感じたら、またしばらく時間をおいて読んだり、時には数日または数週間の期間をおいて読むなどして、何度も繰り返し読んだ。そのうち、全体の流れを覚えるほどになると、いくつかのことに気づくようになった。最初は気づけなかったが、繰り返し読むことで、全体を貫く中心となるテーマが見えてきたように感じた。全体を見ることで、各部分が独立しているのではなく、相互に関連することで送っているメッセージがあると感じられるようになった。

また、糟屋 (2012; 2014) が明らかにしたように、ものごとを見る考え方を作るのは、何を重要と考えるか (重みづけ)、何を原因とし、結果と考えるか (因果関係の設定)、関連する人々にどのような属性を与えているか (登場人物の属性の付与) が大きな役割を果たす。よって、重みづけ・因果関係・登場人物の属性の視点から見直すと、出来事の別の側面が見えてきたり、広い視野で見ることができる。そこで、A さんのディスコースを分析するうえでも、どのような重みづけや因果関係・属性の設定がされているかを検討していくこととした。

2.2 分析データ

本研究は、分析データとして、共同プロジェクトの中で共同研究者が収集した児童養護施設経験者 A さんの語りをを用いている。この語りは、児童養護施設経験者を支援するために、児童養護施設経験者の経験や心理について理解を深め、心理臨床的アプローチを探ることを目的に収集されたもので、A さんと臨床心理士である共同研究者 (面談者) が交互に話すことで成り立っているものである。A さんは福祉関係の仕事をしている男性で、父

親不在と母親からのネグレクトのために小学生の時に施設に入所し、就職するまで施設生活を送った経験を持つ。

面談をする協力者を探すに際しては、面談が本人にとって心理的な負担にならないようにする配慮から、協力者が信頼している関係者を通して紹介してもらった。面談者は、事前にメールや電話で協力者に連絡し、面談の時間や場所を決め、その際、面談の場所はできるだけ落ち着いて話を聞ける場所が選択された。面談は半構造化面談とされた。最初に、研究の目的と意義、内容を説明し、プライバシーの保護、面談者の連絡先、面談を中断してもよいことを伝えるなどの倫理的な配慮がなされた。面談は、面談者が協力者の語りに共感しつつ、その時々の内容に応じて、応答や質問を加えながら進められた。面談中の対話は、協力者の許可を得て、ICレコーダーを用いて録音された。

データは、面談者により作成されたスクリプトを、本論文の筆者がディスコース分析がしやすいような体裁に整えたものを使用した。その際、スクリプトの内容について不明な点は、面談者に再度音声聞いて確認してもらうという手続きを取っている。最初のAさんの言葉を1、次の面談者の言葉を2というように、順番に番号を振った。話者が交替するごとに番号を振っているので、1つの語りが単語1つの短いものもあれば、文がいくつも続く長いものもある。本分析がデータとして使用したインタビューは、全体で1時間ほど続いており、話者の交替の合計数は398である。奇数番号がAさんの言葉であり、偶数が面談者の言葉であるが、誰が話しているかを分析途中でわかりやすくするために、Aさんの言葉を「A1」「A3」、面談者の言葉を「B2」「B4」などとした。話の内容から、適宜、句読点を振り直した。なお、スクリプトの内容について、プライバシー保護のため、事実の趣旨を損なわない程度の改変を行なっている。また、論文の公表に際し、引用部分については協力者の確認を得ている。

3. 分析結果

3.1 本分析の手順と、気づきの経緯

「2.1 分析方法」で述べたように、本研究では、鈴木(2007)および能智(2011)に従って、Aさんの語りの原稿を何度も繰り返し読み返していった。始めのうちは、語られている内容がよくわからなかったが、そのうち、場面の状況が目に見えようになり、全体の流れを覚えるほどになると、最初は気づけなかった全体を貫く中心となるテーマが見えてくるようになったと感じた。

まず、筆者が感じたのは次のようなことだった。Aさ

んは、語りの最後の方で、今後に向けての不安なことは何かと聞かれた時に、子育てに関して「親のモデルが持てないこと」「頼る親がないこと」や、「(これまで)経験していないこと」などと答えていた。しかし、筆者にはこの答えが腑に落ちなかった。これは、最後に、不安なことは何かという話になる前の語りで、Aさんが「生まれてこなければよかった」「自殺を考える」などと言っていることと組み合わさると感じたからである。そのような重大なことを言っているのに、いざ、未来に向けての不安を聞かれると、「子育てのこと」「(これまで)経験していないこと」などの生活の具体的なことを答えることに、ことの重大さが合わないと筆者は感じた。このくい違いの理由が筆者にはわからず、何がAさんの中にあるのだらうと思った。何か、そのように、「生まれてこなければよかった」などと思うのに見合うような根本的なもの、心の中の深い苦しみがあるのではないかと思った。

そういうことを考えながら読み返していくうちに、さらに筆者は次のようなことに気づいていった。それは、Aさんの語りの中に繰り返し現れるテーマとして、「自分は愛されてこなかったので、人を愛することができない」というものがあるのではないかということだった。これは、音楽の中に現れる主題のように、繰り返し何度も現れていた。そのことと、Aさんの苦しみが関係しているのではないかと筆者は思った。そこで、Aさんの語りを「愛」という視点で見直してみることに思い至った。

Aさんの語りを、再び、「愛」という視点で繰り返し読んでいくうちに、Aさんの語りの中にある「愛」に関する矛盾に気づいていった。それは、Aさんの語りが、「自分は愛されてこなかったので、人を愛することができない」という主題を繰り返し提示する一方で、その語りの中に「これまでも様々な人々に愛されてきた。そして、多くの人に愛を与えてきた、愛することができる」ことを示すような内容が数多く見てとれると思われたことである。Aさんがこれまで「愛され、愛してきた」軌跡が、Aさんの語りの中に、星空の中の数々の星のように散りばめられていたことに、筆者は気づいていった。

以下、Aさんの語りの進む順番に、Aさんの語りの中で「愛」に関連すると思われる箇所を選び、どのように「愛」が語られているかを示していく。特に、Aさんが何を重要と考えるか(重みづけ)、何を原因とし、結果と考えるか(因果関係の設定)、関連する人々にどのような属性を与えているか(登場人物の属性の付与)の視点で見えていく。

3.2 「愛する」とは何か

「愛」の視点で分析するにあたり、まず、「愛する」とはどういうことなのかを考えてみる。ドイツ生まれのアメリカの社会心理学者である、エーリッヒ・フロムは、愛するとはどういうことかを、「愛するということ」(1991)で説明している。フロムは、「人間のもっとも強い欲求とは、孤立を克服し、孤独の牢獄から抜け出したいという欲求である」とし、人間はいかに孤立を克服して他者との一体感を得るか、という問題を持っており、その答えが愛であるとしている (p.25)。このように、フロムは、愛を、人間の実存の問題への本質的な答えとしてとらえている。

フロムによれば、愛は、能動的な活動であり、何よりも与えることであり、与えるものは、物質ではなく、「自分の中に息づいているもの、喜び、興味、理解、知識、ユーモア、悲しみなど」であり、与えることで、「たがいに相手の中に芽生えさせたものから得る喜びを分かち合う」のである (p.46)。さらにフロムは、愛の基本的要素として「配慮」「責任」「尊重」「知」の4つを挙げている。

愛の要素としての「配慮」とは、相手を気遣うことであり、「愛する者の生命と成長を積極的に気にかけること」である (p.49)。「責任」とは、義務ではなく自発的な行為であり、「他の人間が何かを求めてきた時、その要求に応じられる、応じる用意がある」という意味であるとする (p.50)。「尊重」とは「人間のありのままの姿を見て、その人が唯一無二の存在であることを知る能力」のことであり、相手が、その人自身のために「その人らしく成長発展していけるように気遣うこと」である (p.51)。そして、「知」とは、相手のことを知ることであるが、それは「表面的なものではなく、核心にまで届くもの」であり、「自分自身にたいする関心を超越して、相手の立場に立ってその人を見て初めてその人を知ることができる」というレベルの「知」を指す (p.52)。これら4つの要素は互いに依存し合っている。例えば、人に対する「配慮」や「責任」には「知」が必要であるし、「配慮」が動機でない「知」は空しいものである (p.52)。

このようにフロムは、「愛」を単なる親密さや愛着のような感情ではなく、人間が社会文化の中で生き、存在することに関わる本質的なものとしてとらえている。Aさんのディスコースを分析するに際して、フロムの定義に照らし合わせながら、「愛」を見ていく。

3.3 語り全体の枠組み

本研究が対象とする語りの大きな枠組みは、以下のよ

うな構成となっている。あいさつの後、次に示す B4 のような面談者の問いかけで語りが促される。これに対して、AさんはA5で、「どのようなエピソードか」を質問し、面談者が B6「あまり考えなくて、雑談のほうがいい」と促し、語りが始まっていく。

B4: はい、じゃあ、これまでの施設を出られた方に対する個別のインタビューとして、その人の育ちについて、生きていく力とは何かをお聞きしたいと思います。今まで、どのような経験とかエピソードが支えとなっているか、今はどのような気持ちを過ごしていて、どのようなサポートを必要としているか、あるいはどのような不安を抱えて、未来に向かって過ごそうとしているのか、お話を伺いさせていただきたいと思います。

A5: どのようなエピソードでしょうか。

B6: あまり考えなくて、先のような雑談のほうがいいと思います。さっきの、詳しくわからなかったが、小学校〇年生の時から〇年生の時までご自宅でお母さまと一緒に過ごしていた。

また、1時間ほど続いた語りは、次のような面談者の言葉で終了する。

B390: そうですか、わかりました。だいたい、そんな感じで。長い間お聞きしました。1時間以上。

A391: 僕はそんな感じです。

(中略)

B398: ありがとうございます。こちらこそ長い間、ありがとうございます。お名前を書きます。(中略)ありがとうございます。じゃあ、これで終わります。

このように、面談者によって設定された全体の大枠の中で、Aさんは、自分のこれまでの経験や気持ちについて語っていく。語りは、基本的には時系列で進むが、ところどころに、関連したエピソードや今の気持ちや考えが語られる。Aさんの語りは、時系列の話に従って、パート①からパート③の、大きく3つの部分に分けることができる。①A7からA83が施設に入る前から小学校時代にかけての話、②A85からA195が中高時代(A161までが中学校時代、A163からA195が高校時代)の話、③A197からA389が高校を卒業して施設を出てからの話となっている。この中で、Aさんの語りは何を伝えているかを、「愛」という視点から見ていく。3.4ではAさんの「愛されてこなかった」し、そのために、「愛することが難しい」という思いがどのように語られているかを

見ていく。しかし、語りを注意深く見ていくと、Aさんの語りには、Aさんが、様々な場面で様々な人たちから愛されてきたことが表れており、またAさんがこれまで様々な人に愛を与えてきたことが見てとれる。3.5では、筆者が気づいた、Aさんが「愛されていた」と考えられる部分を示す。さらに、3.6で、Aさんが「これまで多くの人を愛してきた」と考えられる部分を示す。

3.4 語りから見るAさんの現実のとらえ方「愛されてこなかったのに、愛せない」

Aさんの語りを見ていくと、「愛されてこなかった」し、そのために、「愛することが難しい」というテーマが繰り返し現れることに筆者は気づいた。その「愛されてこなかったのに、愛せない」というテーマがAさんの語りの中にどのように表れているかを、話の流れの順に見ていく。

まず、パート① (A7からA83の施設に入る前から小学校時代)の部分で、Aさんは、自分が愛されてこなかった、または大切にされてこなかったことを、いろいろなエピソードの中で語る。次のように、母親のA9「食事も作らない」、A23「朝方まで帰ってこない」「食材ない」などのA7「ネグレクト」「育児放棄」について述べる。また、学校での体罰について、A9「先生にたたかれて学校へ行けなくなった」ことについて語る。

A7: そうですね、過ごしていただけですけど。基本的にネグレクトなので、育児放棄なのです。

B8: そうですか。育児放棄と言うと、食事も作らない。

A9: 食事も作らない。学校も、学校も通わせようとしたんだけど、学校がよくわからなかったの。学校にもいじめというか、先生にたたかれて学校へ行けなくなった。

A23: 学校へ行かず、ゲームやっているか。昼は、母親は寝ているので、夜の仕事なので、ちょっと居心地が悪いので、街を徘徊したりとかして。しばらくは、まあ、おもちゃ屋さんがあって、ファミコンがあって、10円でできるので、親の財布からお金を取って行って、そこで時間をつぶして帰る。親が仕事行く間際までしていた。母親は5時から6時出勤していた。その朝方まで帰ってこないの、その間、冷蔵庫の中のをあさっているか、後は唯一できる料理がゆでたまごだったので、それを作って食べるとか、どうしても家に食材ないとか、食材使い方がわからないと、近くのコンビニで廃棄のコンビニの弁当をもらいに行くとか。

次に、A41「父親はいない」と父親の不在を述べる。

その後、A47「(施設で)生い立ちの整理をしてなかった」ことを語る中で、「悪いことをした、少年院へ入ったように思った、そういう感覚で施設に入っていた」と述べ、「母親がなんらかの都合で、どうしようもなく施設に預けてくれているんだと、そういう感覚になっていけば、多少なりとも気持ちはいい」としている。これは、実際は、生い立ちの整理を施設でしていなかった自分の場合は、状況を理解していたのとは「雲泥の差」があり、「自分が悪くない」と知らず、「母親がどうしようもなく施設に預けてくれている」とは思えず、「気持ちはよくなかった」ことを示していると考えられる。A47「そういう感覚を持ちながら、ずっと生きていくのは」とはどんな気持ちだったかを、ここではAさんは語っていないが、施設での生活を送る中で、愛してくれなかった母を悪いと責め、母が愛してくれなかったのは自分自身が悪かったからと自分も責める気持ちをAさんが持ち続けていたことが推測できる。

B40: ○○(地名)では何歳まで。

A41: 話では○歳までいた。時期が合わないの、○歳から○歳、までいて、父親はいないんですけど。(中略)○○(地名)へ来たんだけど、母親が夜の仕事がちょっと楽しかったんで。それを施設の方に聞きました。

A47: 僕のいた時は、生い立ちの整理をしていなかった、結局はしなかった。今はできる子はしている。しているところとしていないところがあるみたいなんですけど、僕はしたほうがいい。一体どういう経緯で施設に入ったのか、施設に入ることは自分にとっていけないことをした、悪いことをした、少年院へ入ったように思った、そういう感覚で施設に入っていたんですよ。そういう感覚を持ちながら、ずっと生きていくのは、虐待を受けたことも酷い酷い、どんな生い立ちであれ、施設に入っている時点で普通ではない。その部分で、知っておくのと知らないのでは雲泥の差があるので、自分が悪くないということを知っておいたほうがいいと思う。やっぱり母親がなんらかの都合で、どうしようもなく施設に預けてくれているんだと、そういう感覚になっていけば、多少なりとも気持ちはいい、はい、いいと思うので。生い立ちの整理はしてほしいなあと思っています。

施設の職員との関係について、A81「1対1にならない」「個別の関わりを持つことは難しい」と親密な関係を持てなかったことや、1対1になるのはA81「悪いことをした時だけ」であったことを語る。これらの語りは、Aさんが、悪いことをした時以外の場面、例えば、うれ

しい時間や悲しい時間を、個人的に施設の職員と共有することができなかったことへの寂しさや残念な気持ちを表していると推測される。

B80: 施設の中では、直接、職員とも1対1という場面は。

A81: 1対1は、悪いことをした時ですよね、悪いことをした時しか1対1にならないですよね。基本的に出てからわかったんですが、6対1なんですよね、大人と子どもの割合、今は、5.5と1。うちの施設は20人子どももいて職員4人。だけど三勤交代で1人休みなので、朝は1人に対して20人、お昼は朝番と遅番の人で2人で20人、夜は1人で20人、20人の中の1人なので、個別の関わりを持つことは難しい、悪いことをした時だけです。

B82: はあ、そうか。悪いことしないと、1対1にならないのはせつないですね。

A83: と思いますね。

以上のように、パート①の部分では、親に育てられなかったことや、預けられた施設の職員と親密な関係を持てなかった出来事を通じて、「愛されなかった」ことについて語っている。そして、パート② (A85からA195までの中学高校時代)に入ると、Aさんが「愛されなかったために、自分が愛することができない」ことについての気持ちを語る部分が出てくる。

最初は、中学時代の施設での問題点について話しているうちに、A135「生い立ちのことを自分をだめなやつだと思うこと」に結びつけてしまうことについての話に展開していった時の語りである。A137で「(自分の気持ちを) 言わない」し、「寡黙」であるし、「(言うことが) できない」ことを、「この生い立ちがあつて」「今までやってこなかったから」と、「あつて (あつたので)」や「から」という原因を表す言葉で結びつけて語っていることから、「生い立ち」や「今までやってこなかった (今まで自分の気持ちを人に言ってこなかった)」ことが原因で、人に気持ちを言うことができないとAさんがとらえていることが見てとれる。そして、その結果、「だんだんだめな方向になって、生まれてこなかったらよかったと考えて、自殺を考える」ようになる。A139「家族に迷惑がかかるなあ」という理由で「死ねないなあ」と思うが、「(家族が) あんまり悲しむとか考えない」と述べていることから、自分が「(気持ちを) 言えない」だけでなく、相手が「悲しむ」と思えないことを、Aさんが重く考えていると推測できる。この一連の語りから、Aさんが、親に育てられなかった、愛されなかったという生い立ちが原因で、自分の気持ちを言うことや、自分が人と情緒的な

関わりを持つことができなくなっているという因果関係で考えており、そのことを重くとらえていると思われる。

A135: (前略) 施設にいる子どもが、(中略) 自分のことを特別と思わないほうがいい、生い立ちのことを自分をだめなやつだと思うこと。

B136: だめというのは、どんな感じのところで。

A137: 家族とケンカすると、なんで言ってくれないの、人の気持ちを察して言わないようで、寡黙なんだけど。おれできないよとか言ったりすると、なんでできないの。この生い立ちがあつて、今までやってこなかったから、なんて、自分の生い立ちの。そうするとだんだんだめな方向になって、生まれてこなかったらよかったと考えて、自殺を考える、自殺したら何が残るのかなど考えたりします。

B138: 何が残るのかなどこまで。

A139: もし自殺したら、誰に迷惑をかけるのか。(中略) でも家族に迷惑かかるなあとか、それだと死ねないなあ、あんまり悲しむとか考えない。

また、学校での話では、A149「自分と一般の人と違う、壁を作ってしまう、おれは施設」と感じていた、「一般の人と違う」「壁を作ってしまう」という疎外感や異質感についてや、A149「貧乏暮らしをしている人たち」へのA151「優越感」、A153「明るくて人気があつて、一般家庭で育っていい思いをしている」人たちへの「劣等感」など、自分とクラスメートの状況を比較してしまう傾向について語る。ここでは、A149「一般の人」、A153「一般家庭」の「一般」という言葉が繰り返されていることから、Aさんが「一般」の普通であることとそうでない自分を強く意識していることが見てとれる。

A149: そうそう、学校を通いいつもゲームセンターにずっと通っていた。施設に帰らないで、友達の家へ行ったり、悪いことをしていた、悪いことばかりしていた、悪いことを、施設のルールをしょっちゅう破っていた。自分と一般の人と違う、壁を作ってしまう、おれは施設、そういうのありますよね。逆にちょっと貧乏暮らしをしている人たちのほうが気が合ったり。

B150: わかってくれる。

A151: わかってくれるか、どうなんですかね、優越感かもしれない。

B152: あー。

A153: 自分がこの人よりまさっているかもしれない、申し訳ないですけど、ま、一緒にいて楽しかったんですけど、そういうのもあつたかもしれない。劣等感が感じているとい

うのはあったかもしれない。底抜けに明るくて人気があって、一般家庭で育っていい思いをしているんだなあみたいな感覚はありましたね。

パート③ (A197 から A389 の高校を卒業して施設を出てから) の後半で、面談者から B306 「未来に向けての不安とか必要なサポート」を聞かれると、A307 「子どもができた時」のことを挙げているが、その理由として、A307 「父親の存在知らないの」を述べていて、子育てについて「父親の存在を知らないこと」が理由で不安としてとらえられていることが見てとれる。その後、A313 「(父親に)会えるのなら会いたい」と父親の話になると、A313 「おやじの血を引いている」と話が展開する。そして、女性について軽く考えていて、「なんでかなあとよく考えると」、その原因が、「母親の血が流れているから」「親の存在や血をすごく意識する」「遺伝子も含まれている」などと、自分を育ててくれなかった両親の子どもであることととらえていることがわかる。さらに、自分の女性への感情について、A323 「好きの向こう側がない」、A325 「大切にしたいとか(ない)」、A327 「愛するとか、大切にするとか」という感覚は薄い」と語っている。この一連の語りから、「愛してくれなかった両親の子どもであることが原因で、自分は人を愛することができない」と A さんがとらえていると考えられる。また、ここで、A さんが A327 「愛すること」を、「大切にすると」というような「感覚」であることととらえていることが見てとれる。

B306: (前略) 未来に向けての不安とか必要なサポートは、これからについて。

A307: 子どもができた時ですよ、僕は父親の存在知らないの。

B308: 生まれた時から。

A309: 覚えていないですよ。

(中略)

A313: そう、いて会えるのなら会いたい。会って幻滅することもあるでしょうし、こんなおやじの血を引いているんだという。自分も女性に対してのアプローチというか、女性の見方が、軽く考えていて。(中略) なんでかなあとよく考えると、母親の血が流れているからかなあなんてことを思ったことも。親の存在というか血をすごく意識するんでしょうね。遺伝子も含まれていると思う。

A323: (前略) 好きなんですけど、好きの向こう側がなくて。

B324: 向こう側とか。

A325: 大切にしたいとか。

B326: 自分にそういうことがないと、実感として。

A327: どうなんですかね、愛するとか、大切にするとかという感覚は薄いのかなと感じていますがけれど、自分として、難しいですね。妻になんで惹かれたかという尊敬できる人だったから、魅力的だし。

さらに不安なこととして、A331 「父親像が見えない」ことや A335 「頼る親がない」ことについて語った後、A347 「頼ることに躊躇がある」ことに話が展開していく。A347 「頼ったら迷惑がわかるじゃないか」と「(地域で)知らない人に隣の人に少し声をかけてみようというもの」「躊躇がすごくある」、A357 「(家族に頼りたい気持ちを) 言わない。ありがとう、おいしいわと言えるんですけど」、A361 「本当はもっと仕事どんどんやっていきたいことを、なかなか言えない」などと語っている。これらの一連の語りは、親に頼るという経験をしてこなかったことで、やってもらったことに対してのお礼は言えるけれど、相手に何らかの負担がかかるかもしれないことについて人に頼るということが難しくなっている、人との間に壁があり、親密な愛着のある関係を結ぶことが難しいと A さんがとらえていることを表していると考えられる。

A331: その、父親像が見えない。

B332: 記憶も写真もないし、自分が親になった時のモデル。

A333: こういう父親でいいの。

B334: モデルとか。

A335: 親のモデルが持てない、それが1つ。あとは頼る親がないというか、子どもを育てる夫婦だけでは、子どもを育てる夫婦だけでどうにもならない時があつて。

(中略)

B346: どういうことを頼りたい。

A347: 子育てのこと、仕事してますから、入院した時にどうしよう。子どもの保育園だったり、泊まりの仕事があつたら、どうしようかなあ。おしめ、食事、どうにかならないかとか、育児を家族だけでやるには大変かなあ。(中略) もっと地域で繋がれたらなあ、もっと楽になれるのかもしれないかなあ。自分から、頼ろうとしないというところもある、頼ることに躊躇がある。頼ったら迷惑がわかるじゃないか、躊躇がすごくある。知らない人に隣の人に少し声をかけてみようというもの。

(中略)

B356: 頼りたい気持ちは家族に出せるほうですか。

A357: 言わない、言わなすぎて怒る。逆にいろいろやってくると、ありがとう、おいしいわと言えるんですけど。

(中略)

A361: 家族に押しつけちゃって、本当はもっと仕事どんどんやっていきたい、転職して。でもそこはなかなか言えない。これ以上負担をかけたらつらいかなあと思ったり。

A373 「(祖父の死に際して) いとこは号泣しているのに、1回も泣けなかった」時に、「おじいちゃんのところに行こうと思えば行けた」のに、行こうとしなかったことに対して、「なんで、(おじいちゃんに) からまなかったかなあ」と「罪悪感みたいなのを感じて」いることを語る。特に、A377 でも「行こうと思えば行けた (のに行かなかった)」と繰り返していることから、そのことへの後悔と、泣けなかったことへの罪悪感や、肉親に愛着を感じて、その死を悲しんで泣くことができないと、情緒的感情を持ってないことを強く意識していると筆者は感じた。

A373: おじいちゃん亡くなった時、1回も泣けなかったんです。お母さんのお父さん。で、いとこは号泣しているんですよ。その時ちょっと罪悪感みたいなのを感じて。なんで、からまなかったかなあ、おじいちゃんのところに行こうと思えば行けたし。

B374: あー。

A375: ○年前か○年前なんで。

B376: はい。

A377: その間の期間に行こうと思えば行けたし。

このように、両親の子どもであること、両親に育てられなかったこと、十分に愛されてこなかったことが原因で、親密な気持ちや愛着を感じるなどの愛する力が自分に不足しているのではないかという気持ちが、父親や母親についての語り、施設の職員との関わりについての語り、家族との関係についての語り、学校の友人についての語り、近所の人との関わりについての語り、祖父の死に際しての語りなどで、繰り返し述べられている。

この部分の特徴として、次の2点がある。第1に、「(十分に) 愛されなかった」「愛することができない」というような、本来あるべきものが「ない」というような欠損を表す表現が繰り返し出てくることである(例:A7「育児放棄」、A9「食事も作らない」、A23「朝方まで帰ってこない」、A41「父親はいない」、A47「普通ではない」、A81「悪いことをした時しか1対1にならない」、A137「今までやってこなかった」、A139「悲しむとか考えない」、A149「一般の人と違う」、A307「父親の存在知らない」、A323「好きの向こう側がない」、A327「愛する

とか、大切にするとかいう感覚は薄い」、A331「父親像が見えない」、A335「頼る親がない」、A357「言わない」、A361「言えない」)。

第2に、「愛されなかった」ことが原因で、今自分が「愛することができない」というように、「から」や「ので」などの理由・原因を表す表現を使って、2つのことが因果関係として結びつけられていることである。(例:A137「この生い立ちがあって、今までやってこなかったから(できない)」、A307「子どもができた時ですよ、僕は父親の存在知らないの(父親像がわからない)」、A313「こんなおやじの血を引いている」「母親の血が流れているから」、A327「愛するとか、大切にするとかいう感覚は薄い」)。

以上のことは、Aさんが、自分の人生において本来あるべき愛がなかったことを重みづけて考え、自分のことに対して、愛がなかったことが原因で、愛することができなくなっているという見方をしていることを表すと考えられる。

3.5 語りが示すこと「Aさんは愛されてきた」

3.4 で見たように、Aさんの語りには、自分が「愛されなかったので、愛することができない」というテーマが繰り返し現れるが、Aさんの語りをよく見ると、Aさんが様々な人々に様々な場所で愛されてきた軌跡があると筆者には思われた。これから、Aさんが「愛されてきた」ことに関して、以下の3つの点を述べていく。まず、Aさんがどのような人たちからどのような場面で、どのような愛を受けてきたかを見る。そのあとで、Aさんがそうした愛をどう評価しているかを見る。そして、それらの愛がAさんの今の状況にどのような影響を与えているかを考える。

まず、Aさんがこれまでどのような愛を受けてきたかをAさんの語りから見ていく。A29の小学校に入る前の話で、「うちの部屋来る」と自分の部屋に来てもいいよと誘ってくれたお姉さんの家にAさんが「入り浸って」いて、「病気になった時、お姉さんの家にいた」り、お姉さんが「果物をくれたり」したことが語られる。また、「家族のように」していた食堂に、大好きなお姉さんがいて、「ご飯を作ってもらって食べたり、歌を教えてもらったり」していたことを語る。A33「お姉さんは家族の一員」で、「(食堂は) 家庭に近い場所、そういう雰囲気があった」、A37「支えてくれる人はちょこちょこいた」とAさんは語っている。このように、寄る辺のない、小学校に上がる前の子どもの世話をしていたのは、これらの人々が、Aさんのことを心配し、気遣い、いたわって

たからであり、これは愛であったと考えられるのではないだろうか。

A29: そう、相手になってくれる存在は得難かった。小学校上がる前は〇〇（地名）に住んでいて、小学校は〇〇（地名）なんですけれど、母親が仕事でいなくて、僕の居場所は近くの食堂と、母親と間違えて声をかけた、（中略）お姉さんですね、その家に入り浸っていました。（中略）お母さん、お母さんと言うとお母さんでなかった。単純なきっかけで出会った。うちの部屋来る、と言われて。病気になった時、家にいるのがいやだから、（中略）そこのお姉さんの家にいた。たいしたことはないのだが、果物をくれたりとか。うちの母親と年齢変わらない、ちょっと若いかなあ、うちの母親が〇歳上なので。（そのお姉さんは）当時は〇歳だった。食堂で、ずっとバイトして、家族のようでした。おばちゃんがいる、怖いおじさんがいて、お姉さんがいて、お姉さんが好きで、小学校上がる前で、好きで好きで毎日行っていました。お姉さんにご飯を作ってもらって食べたりとか、（中略）そのお姉さんから歌を教えてもらった。そのお姉さんが好きな〇〇（歌手の名前）とか。たぶん年代的に変わらないと思う。

A33: お姉さんは家族の一員だった、家庭に近い場所、そういう雰囲気があったと思う。ちょっとほっとかれたりした時、料理人のおじさんに下敷きをたたいたりしたとかして、反抗したりしていた。あそこはすごく支えて。

（中略）

A37: 支えてくれる人はちょこちょこいたなあっていう感じです。やっぱり母親じゃあないです。

A57 からの施設の職員に関するエピソードでは、**A57** 「施設を出てから、食費をうかせるために、朝食の時間に）帰りすぎて怒られたこと」について、**A59** 「言ってくれてよかった」「そうしないと依存になっていた」、**A61** 「教えてもらった」と述べている。また、語りの後半で、**A125** 「信頼関係築いている先生がいるか」、**A127** 「施設の人が）自分のためを思って言ってくれているのがわかるかどうか」ということに言及する場面がある。この2つの部分を合わせて考えると、**A**さんは、施設の職員が注意したのは、**A127** 「自分のためを思って言ってくれた」のであり、施設に「信頼関係を築いていた先生がいた」と感じていると思われる。これは、施設の職員から、自分の成長のために怒られたと**A**さんが感じていたということであり、このことから、相手の身になって考えて、その人の成長を願うという「愛」を**A**さんが受けていたと言えると考えられる。

B56: 施設の中で帰ってきていいよ、施設に相談に来ていいよとか、あんまりない。

A57: 基本はあるはずだと思う。帰りましたし、帰りすぎて僕は怒られました、朝ご飯を食べに帰っていたら。月に半分くらい帰っていた。〇〇（地名）だったので、バイクで帰る途中に必ず施設を通るから。朝まで仕事をしていたので、ちょうど朝食の時間にそこを通るので、食費がうくじゃないですか。だから寄っていた。

B58: へーえ。

A59: それはさすがに怒られましたね。それは甘えすぎたな。でもそれを言ってくれてよかった。そうしないと依存になっていた。

B60: そうか、難しいところですね。

A61: 基本的にウエルカムなんでだけれど、来る時間は朝だし、ごはんを食べに来ているだけでしょ。それは違うよねと、それは教えてもらった。

B124: （前略）問題を抱えたときは。

A125: （前略）後は、信頼関係築いている先生がいるかじゃないか。

B126: どういう人が信頼できるか。

A127: いや、自分のためを思って言ってくれているのがわかる人ですか、ただ感情的になっている人か、があつと言われるかどうか。

また、**A**さんは、一時保護所で、**A63** 「勉強をマンツーマンで教えてもらった」ことを語っている。3.4 で見たように、**A**さんは、施設の職員との関係を**A81** 「悪いことをした時しか1対1にならない」と述べていたが、後に、これとは一致しないことも述べている。**A167** で、職員に「頼ったのが高校受験の時」で、「マンツーマンで勉強した」と語っている。職員の人は、**A171** 「どうだ、勉強見ようか」と声をかけて、1対1で**A**さんの勉強を見てくれた。職員の数が少ない中で、個人的に勉強を見るのは、時間的にも大変だったと想像できるが、**A**さんの様子を見て援助が必要だと感じ、勉強を教えてあげようと思ったのではないか。職員の人は、**A**さんが成長して希望の高校へ入れるように支えてあげたいと思ったと推測され、これは愛であったのではないかと考えられる。

B62: （前略）小学校〇年生から施設に入られたんですよね。そのとき学校は行かれるように。

A63: 学校は、一時保護所にまず入った。そこで勉強をマンツーマンで教えてもらった。

A167: (前略) 高校受験、あと頼ったのが高校受験の時に、職員とマンツーマンで勉強したとか。

B168: 勉強を教えてください。

A169: 勉強を教えてください。

B170: ふーん。

A171: 試験前とか、国語とか、教員免許を持っているので、高校受験とか、たぶん、男の先生が担当だったんでしょうね。どうだ、わかんねえけれど、勉強見ようかとか。

B172: なるほど。

A173: それは覚えています。頼ったかどうかわからないけれど、覚えています、ですね。

施設の調理場の人たちとの関わりについて、A73「施設から逃げ場所として食堂」があったことを述べている。A79「いろんな人に話を聞いてもらっていた」、A205「施設の中では必ず食べられる」、A207「調理場の人が一番で、いい」と A さんは語っている。A215「私の管轄は、あなたたちのお腹満たすことと食事をさせること」という調理場の人たちは、仕事であったとはいえ、必ず食事を準備し、食事をきちんとさせることに責任を感じ、A さんの体を気遣っていたという重要な意味で愛を与えていたと思われる。A215「キッチンにしょっちゅう行っていた」と言う A さんにとって、調理場の人々は心の拠り所であったと考えられる。それは、そこに愛があったからではないかと筆者は考えた。

A73: (前略) 施設から逃げ場所として、食堂だったんです。昔は大舎だったので、厨房があって、料理の手伝いをしたりとか、話したりとか、唯一の逃げ場所だったですね。施設職員じゃなかったです。

B74: あ、厨房の人は、ずっと常駐する時間だけ。

A75: 常駐する時間だけですけれどね。

B76: 女性ですか。

A77: みんな女性ですね。

B78: そうですか。

A79: 怖い人もいました。きれいな若いお姉ちゃんだけれど、ボーイッシュで怖い。いろんな人に話を聞いてもらっていました。

A205: 家だと時間ずれたりするんでしょうけれど、施設の中では必ず食べられる、その心配しないんですよ。その心配が切れたこと、今までのリズムとは違う。まかないとかあったんですけど、そういうのがわからないとか。

B206: 作り方とか。

A207: 調理とか、キッチンで練習していた。(中略) 高校時代から調理場の人が一番で、いいんですよ。

B208: どういう感じでよかったんでしょうか。

A209: 職員面じゃないんですよ。

B210: 職員面ってあるんですね。

A211: 職員面ってあるんですよ。調理の人は調理なんで、けっこう、記念コインを集めているのよね、私もそれ拾って、集めているのよねとか。いいよ、1000 円にしてあげるとか、いいんですか。(笑い)

B212: (笑い) なるほどね、そういう面ではフランクに。

A213: フランクです。

B214: 固さとか。

A215: ルールに、固さというか、運営する側とか。私の管轄は、あなたたちのお腹満たすことと食事をさせること。他のこと知らないけれど、よかったんかもしれないですね、あまり厳しいことも言わない。でもキッチンにしょっちゅう行っていました。

学校では、先生からは、A69「音楽やってみたらと言われたこと、ほめられたことが大きい」し、A63「1人で校庭で遊んでいたら、一緒に遊ぼうと言ってくれた子もいた」、A67「友達ができたことが大きい」と A さんは語っている。これらの人々は、これまで学校に来れずにいた A さんの事情を知っていたと推測される。少なくとも、学校の先生は状況をわかっており、そんな A さんへのいたわりで、何か打ち込めるもの、成長の支えになるものを与えたいという気持ちで、A さんを音楽に誘ったのではないだろうか。また、一緒に遊ぼうと言ってくれた子も、一人ぼっちだった A さんに対しての子どもなりの思いやりや優しさであったのではないだろうか。このように、学校にも、人々の A さんに向かう愛があったと言える。

A63: (前略) 施設に行ってから、冬休みの時期だったので、少し休みあって、施設に慣れる時間があったので、学校へ通いますと、通って、友達がすぐにできたのが救いだった。1人で校庭で遊んでいたら、一緒に遊ぼうと言ってくれた子もいた。その子と仲良くなったことで、学校が楽しくなった。(中略)

A67: (前略) 新しい学校にはなじめたのがよかった。それに友達ができたことが大きい。

(中略)

A69: 学校の先生が声をかけてくれて、音楽やってみたらと言われたこと、ほめられたことが大きい。

さらに、施設を出た後、A187「(家を) 〇年間シェアしていた」友達の存在もあった。A189「1人で暮らす自信がなかった」し、A191「不安」だったAさんが、A193「僕は不安じゃなかった」と言えたのは、この、A187「仲良くしていた」、Aさんが「施設の話をする」など自分のありのままの姿を見せることができた友人の存在が大きかったのではないかと思われる。

A187: 合宿で、すごいおもしろいやつがいて、そこで話すようになって、そいつとは施設の話とかして、施設の話をしてうらやましいと言われた。そいつ父子家庭なんですよ、ほぼ家にいない、僕が小さい頃の経験のような。なので、そのやつとしょっちゅう遊びに行ったりしたとか。けっこうしっかりしていて、仲良くしていた。〇年間シェアしていた、家をシェアしていた、施設を出た後に。

B188: なんかかかんかと友達のつながりが、そこが。

A189: 僕は1人で暮らす自信がなかったというもある。

B190: 出たあと、ものすごく不安じゃないかと。

A191: 不安ですね。

B192: ポンと社会へ、不安。

A193: 僕は不安じゃなかった。自由になれる感じが強い、だから不安はあまりなかったですね。

ここまで、主として、パート①とパート②の小学校から高校までの施設にいた時の話である。Aさんは、確かに、親からは目に見える形で愛情を受けてきたとは言えないかもしれない。しかし、その一方で、周りにいた人々から愛を受ける経験はしてきている。寄る辺のない状態の幼い頃に世話をしてくれていたお姉さんたち、厳しく育ててくれた施設の職員、受け入れてくれた調理場の人たち、音楽に誘ってくれた小学校の先生、気を許せる友達、そういう人々が周りにたくさんいたことに気づかされる。そして、その人々についての語り、随所に出てきている。

これらは、様々な形の愛であったと言えるのではないだろうか。例えば、A29の、Aさんが病気の時、「うちの部屋来る」と誘ってくれ、果物をくれたりしたお姉さんはAさんのことを心配し、気遣ってくれたのだろう。A29やA33の、ご飯を作ってくれたり、歌を教えられたりしたお姉さんも、Aさんを思いやってくれていた。A59やA61で、Aさんが施設を出てから食事がうくから朝食の時間に施設に寄っていたのを、「それは違うよね」と教えてくれた施設の人、Aさんの成長を願っていた。A69で、音楽に誘ってくれてほめてくれた学校の先生も、Aさんの心の支えや成長の力になるものを与え

ようとしていたのではないだろうか。これらの愛は、フロムの言う「与える愛」であり、「配慮」「責任」「尊重」「知」の要素を持っていたと考えられる。

では、Aさんは、これらの愛をどう評価しているのか。語りから、Aさんにとっては、支えてくれた人々の愛に対する重みづけは低いのではないかと筆者は感じた。例えば、A37「支えてくれる人はちょこちょこいたなあっていう感じです。やっぱり母親じゃあないです」にあるように、「支えてくれる人はちょこちょこいた」というエピソードの終わりは、A37「やっぱり母親じゃあない」という言葉で締めくくられている。支えてくれた人たちがいたことよりも、それが母親ではなかったことへ焦点が合っていて、それに対する残念な気持ちがこの言葉に表れていると考えられる。

また、施設の食堂の人たちについて語る場面でも、そのエピソードの中で、A73「(食堂は)料理の手伝いをしたりとか、話したりとか、唯一の逃げ場所だったですね、施設職員じゃなかったです」と、「職員じゃなかった」ことを述べている。また、A207「調理場の人が一番で、いいんですよ」としているのに、その後、A209「(厨房の人たちは)職員面じゃない」やA215「ルールに、固さというか(なくて)」「あまり厳しいことも言わない」と語り、調理場の人たちとの関わりそのものが重みづけられず、施設の職員との比較に終わってしまっているように筆者には感じられた。

Aさんのストーリーでは、こうした助けてくれた人々の存在について多く語られており、当時、それがとても大きなことであったことを認識している(例:A33「(家庭のようだった食堂は) すごく支えて」、A69「学校の先生が声をかけてくれて、ほめられたことが大きい」)。しかし、それにもかかわらず、今の自分の存在に結びつくような大切なこととして語られることはなく、今の自分の中に愛を育てることになった理由としての重要な出来事として扱われていないように感じられた。むしろ、こうした「愛」が、本来そうであるべき、親や、親がわりとなるべき施設の職員から与えられなかったという残念さや憤りに焦点が合っているように感じられた。

このように、Aさんにとって、これら愛されたことの重みづけは低くなっているようである。しかし、語りから今のAさんを見ると、これらの人々の愛の影響を受けて今のAさんがあり、Aさんが受けてきた愛と今のAさんの生き方や生活が関連していることをうかがわせる内容がある。例えば、3.6で述べるが、Aさんは現在、福祉の仕事で困難を抱える人たちを支援し、その中で施設における経験や思いを歌にして伝えることをしている。

まず、福祉の仕事で困難を抱える人たちを支援していることについては、A さんが児童養護施設出身ということだけでなく、A29 で語られた、幼い時に A さんを助けてくれた 2 つの場所、2 人のお姉さんの存在と関係しているのではないだろうか。どちらのお姉さんも、A さんの肉親ではなく、A さんとは血縁的なつながりはない。何の義務もないのに、困っている A さんを放っておくことはせず、A さんが A33 「家庭に近い場所だった」と思える場所を提供し、A さんを支えたのである。そのことを、今、A さんが意識していないとしても、苦しんでいる人たちを放っておくことをせず、福祉の仕事で支えようとしていることと関係しているのではないかと筆者は思った。

また、自分の経験や思いを音楽で伝えていることについては、A29 の A さんに歌を教えてくれたお姉さんの存在や、A69 の学校の先生の存在があったこととつながっているのではないだろうか。お姉さんが意識していたかはわからないが、お姉さんが好きな歌をいろいろ教えてあげることで、A さんは楽しい時間を持ち、寂しさから一時でも救われたのではないだろうか。当時まだ小さかったのに、その時にお姉さんから教えてもらった歌の歌手の名前を今も覚えていることから、歌を教わったことが A さんにとって大きな意味を持っていたことが推測される。また、A さんを音楽に誘った学校の先生は、A さんの状況をわかっており、A さんに何か打ち込めるものを与えることで A さんを支えたいという気持ちがあったことが想像される。A さんが自分の経験を歌にして音楽で伝えることで、困難を抱える人々の気持ちを代弁していることと、お姉さんや学校の先生が音楽を通じて A さんを支えようとしていたことが、同じテーマを持って共鳴しているように筆者には感じられた。

もう会うことはない 2 人のお姉さんたちや先生であるかもしれないが、その愛は A さんの存在の中にしっかりとした痕跡を残して生きていると考えられる。A さんが受け取ってきた愛は強い影響を与える力だったのではないかと筆者は考えた。これらの人々が A さんにしてくれたことは、その当時のことを見ても重要だったし（重みづけ）、今の A さんの福祉の仕事などにその影響が表れるほど、影響力があることだったのではないかと（因果関係）。この 2 つのことから考えて、A さんにとって重要なことだったと言えるのではないかと。そして、その重要なことをしてくれた人たちは、まさに今の A さんにとって重要な意味を持つ存在であるのではないかと（登場人物の属性）。

また、A さんは語りの最後の方で、A381 「僕はおばあ

ちゃんたちに育てられた、小さい頃、おばあちゃんたちに育てられた、小さい時」ということを、祖父が亡くなってお線香をあげにいった時に、親戚の人たちとの話の中で知ったことを述べている。筆者は、これを知った時に、1 つの謎が解けたように思った。それは、小さい頃から父親や母親から十分な愛を受けなかった A さんが、なぜ、2 人のお姉さんにかわいがられるような、おそらく愛らしい少年に育っていたかと、筆者は疑問に思っていたからである。A さんは、祖母たちに小さい頃育てられた記憶がなく、そのことをずっと後になって、大人になってから知るわけだが、祖母たちに育ててもらったことが、A さんの存在の中に何らかの痕跡を残して、それがお姉さんたちに愛されるだけの愛らしさを A さんの中に育てていたことに関わっていたのかもしれないと筆者は思った。

以上のように、筆者は、3.5 で見た語りの中にあるものを愛だと思ったが、A さんはそう思っていなかったと考えられる。筆者は、A さんは多くの「愛」を様々な人々から与えられてきたと考えたが、それを A さんが「愛」と認識して、重みづけて今の自分と結びつけていないことが、3.4 で見たような、「愛されてこなかったので、愛することができない」という見方を A さんが持つことになっていることにつながっていると考えた。

3.6 語りが示すこと「Aさんは愛してきた」

3.4 で見たように、A さんの語りの中には、「自分は愛することができない」という気持ちを示すものが繰り返し出てきたが、A さんの語りを見てみると、A さんがたくさん愛を人々に与えてきたことを示すものが見つかった。そのいくつかを取り上げて述べていく。

まず、パート③ (A197 から A389) の施設を出てからについての語りの中の、母親や妹との関わりについての部分を見る。A さんは、母親と妹の関係について、A227 で「妹は〇歳から施設なんで、その点、親子形成ができていない」「愛着が僕よりも違う」と感じていて、母親に「違うだろう、自分の子なんだから、しっかりしなさいよ」と母親の成長を願っている。また、A233 で「(母親と妹のつながりに) なってあげたい」と 2 人の関係が深まることを望む、2 人を思いやる愛を表現している。

B216: (前略) 食事も大丈夫で、そのときに支えというのは、時々、帰れるし、まあ、友達もいるし。

A217: 母親とも連絡できた。母親とお金の工面をすること。車の免許を取ろうとした。でも〇〇(金額)かかるというか、僕も何もできないから、僕を証明するものを何もないから、

その時に (母親に) 少し貸してくれと言って借りた。

B218: うーん。

A219: うん。

B220: お母さんは、応じてくれていた。

A221: 基本的に全然、大丈夫。はい、どちらかというと、うちの妹のほうが。

B222: 妹がいっちゃった。

A223: 妹がいます。そっこのほうが免疫がなくて。

(中略)

A227: 僕は〇年生まで、妹は〇歳から施設なんで、その点、親子形成ができていない、愛着が僕よりも違う。それを感じていて。違うだろう、自分の子なんだから、しっかりしなさいよ。僕を経由でなくて、自分でやんなよ。僕を経由するな、親から言ってほしい。

(中略)

B232: お母さんのつなぎになってあげたいけれど。

A233: 逆になってあげたいけれど、でもつなぎ方をどうするか。

また、妹については、進路について、A239「猛反対をした」ことへのすまなさ、A243「信頼になれるようにならなかった」ことへの後悔を語っている。A243「もう少し言い方があったかな」「もう少し寄り添えるように話し合い (ができればよかった)」、A245「言葉の足らなさでつらい目に合わせたなあ」と妹の立場に立って思いやる気持ちを述べている。

A239: (前略) (妹が) 〇〇 (職業の名前) の学校へ行きたい、母親と僕でそれを猛反対をしたことがあった。お金もないし、それを工面してくれ、それは無理じゃないの。(中略) 年齢が年齢だと注意した。

B240: その時何歳。

A241: 〇歳。

B242: 妹さんがやりたいことを、猛反対してしまった。

A243: 猛反対してしまったことに対して、信頼になれるようにならなかった。父親びてしまったのかなあ、もう少し言い方があったかな、もう少し寄り添えるように話し合い。その日、こっきりの話になった。僕もお金の余裕があったわけではない。

B244: ご自身も大変だったでしょう。

A245: 言葉の足らなさでつらい目に合わせたなあ。

福祉関係の仕事を目指す人たちに対して話をしたエピソードが語られる。Aさんの話を真剣に聞く気がないような様子を見せた人たちに対して、A285「僕は注意を

する」と厳しく接している語りや、A289「(自分の経験を話すことについて) こういう思いで今、話をしている、だから、今日のことをすごく大切にしてほしいし、役立ててほしい」「あなたたちが育てることになる」「あなたがお母さんになる」「それなりの覚悟で行く」「それぐらいシビアだと思う」というAさんの語りから、福祉の仕事を目指す人たちの成長を願う愛、施設の子どもたちへの思いやりの愛を感じた。また、Aさんが、このように厳しく接するという姿勢は、Aさんが受けた施設の職員の厳しい愛を受け継いだものが生きていることを示すのではないかと想像した。そして、こうしてAさんが、将来、福祉関係の仕事をするかもしれない人々に愛をつないでいると感じた。

A281: 自分の経験や思いを語って、聞かせて、どうにもつまらないので、表現しきれないところを歌を歌う。がっかりすることもあるが、おっと思ふこともあれば。

B282: がっかりは。

A283: 聞かないで本を読んでいる。

B284: あー、それは、ありますね。

A285: 僕は注意をする。注意したあとでフォローします。みんなの前で注意して。

B286: 失礼ですね。

A287: 聞く気がないなら、施設のことは簡単じゃない。

B288: そうそう。

A289: (前略) 自分の気持ちを言う時、過去をさかのぼって話す。虐待を受けた頃の話をしたくないといけないうわけで、それを理解していないかなあと思う時があって。こういう思いで今、話をしている、だから、今日のことをすごく大切にしてほしいし、役立ててほしい。役立てないのなら言いたくないし、という話をするんですね。(中略) 多いなあと思うのが、選んだ理由が子ども好きだからとか、就職がこれから伸びるんじゃないかという人がいるんですけど、そんな安易な気持ちで行かないでほしい。(中略) あなたたちが育てることになるんですよ。施設に入所しているということは、あなたがお母さんになることなんですよ。あなたたちには子どもがいません。お母さんになるには、それなりの覚悟で行く。でなかったら、覚悟ないなら行かないでほしい。それぐらいシビアだと思いますよ。だってその人たちの一言で、子どもの人生は大きく変わる。

また、Aさんは施設で育った子どものアフターケアについて語っている。A297「育ててきた子どもを他の事業に任せるとするのはちょっと無責任ですよ」「その子の人となりを知っている職員がやるべきだと思っている」

というところからは、施設で働く人々への厳しい愛や施設にいる子どもたちへの思いやりの愛を感じる。また、「気軽に集まって、同じような境遇の人が集まって」「愚痴が出てきたり、お互いにこうなんだよねと言えるような場」という言葉から、困難を抱える人たちが語り合えるような場所の必要性を言っている A さんの、苦しい人たちへいたわりの愛を感じる。

A297: (前略) ましてやアフターを考える時代になると思うし、アフタケアを施設が担うことになると思う、しなきゃいけないと思う。育ててきた子どもを他の事業に任せるといのはちょっと無責任ですよ、はい。施設で育ててくれた先生が、その子の人となりを知っている職員がやるべきだと思っている、僕は思うんで。(中略) 気軽に集まって、同じような境遇の人が集まって、(中略) 愚痴が出てきたり、お互いにこうなんだよねと言えるような場であって。職員が親身になってうん、うん、そうだねというようなことは、やろうということもできるが、職員も職員の人生があるので、コミットできないというか、深く入れないと思うんです。いろいろあって、職員の充実がある、そこから帰れるような場所づくりなんか必要だと思う。

家族については、A327「妻になんで惹かれたかという」と尊敬できる人だったから」と妻への尊敬を示している。A349 では、近所に友人を作るのを躊躇する妻に対して、「友達を作ろうよ、僕以外に頼れる人を作ったほうがいい」と妻の成長を願って助言している。また、A361「本当はもっと仕事をどんどんやっていきたい」「でも(家族に)そこはなかなか言えない。これ以上、負担をかけたらつらいかなと思ったり」のように、家族への気遣いを示している。

A327: どんなんでしょうかね、愛するとか、大切にすとかという感覚は薄いのかなと感じていますがけれど、自分として、難しいですね、妻になんで惹かれたかという尊敬できる人だったから、魅力的だし。

A347: (前略) 躊躇がすごくある。知らない人に隣の人に少し声をかけてみようというの。

B348: 近所の人とか。

A349: (前略) 友達作ろうかな。作ろうよ、(作らないのは)どうかと思うよと言うと、ケンカ。友達作ったらいいのにね、軽い気持ちで言ったらすごく傷ついたようで、ケンカした。妻は、作らなくてもいいんじゃないか。僕以外に頼れる人を作ったほうがいい。

B356: 頼りたい気持ちは家族に出せるほうですか。

A357: 言わない、言わなすぎて怒る。逆にいろいろやってくると、ありがとう、おいしいわと言えるんですけど。

(中略)

A361: 家族に押しつけちゃって、本当はもっと仕事どんどんやっていきたい、転職して。でもそこはなかなか言えない。これ以上、負担をかけたらつらいかなあと思ったり。

さらに、3.4 で見た、A さんが死ねないなあと思う理由についての語りでは、A139 で家族に対して「もし自殺をしたら、家族に迷惑かかるなあ」と気遣っている。3.4 で見たように、A さんは「あんまり悲しむとか考えない」と自分が情緒的な感情を持ってないことを重く見ていると思われるが、「家族に迷惑がかかる」と考えるのは、家族を思いやる気遣いや優しさであり、これも愛であると考えられる。

語りの最後に、A さんは家族への思いを語っている。A387「関わりの中で傷つき合うけれど」、A389「血のつながった家族は切れないけれど」と、家族への責任という愛を語っている。傷つくかもしれないが、家族と関わってこういう姿勢も家族への愛ではないだろうか。

A381: 動き方があって、いろいろ話を聞いていると、僕はおばあちゃんたちに育てられた。小さい頃、おばあちゃんたちに育てられた、小さい時、そう言っていた、そうなんだ。

B382: そう、後から聞かされる、それはいつ。

A383: おじいちゃん亡くなって、線香をあげこいた時、ちょろっと話して、ですね。(笑い) まあ、いろいろありますね、葬式とかですね、まあ、経験していないことなので、不安かな、それがどうなるのかなあ、不安かな。

B384: (前略) いろいろな人との関わり大事。

A385: 関わりは大事ですよ。

B386: 大事。

A387: 関わりの中で傷つき合いますけれど。

B388: そうですね。

A389: しょうがない、それも経験の1つかなあと思うんです。本当にだめなら切れまいが、家族は切れないですけど、血のつながった家族は切れないけれど。

以上のように、A さんは、様々な人々に愛を与えてきた。母親に対しては、A227 で、「(妹のことについて) 違うだろう、自分の子なんだから、しっかりしなさいよ」と、母親の成長を願う愛を示している。この背景には、A233 の「(母親と妹の) つなぎになってあげたい」に示

される、母親と妹を思いやる愛があると思われた。妹については、A243でも「(進学について) 猛反対してしまったことに対して、信頼になれるようにならなかった。もう少し言い方があったかな」、A245「言葉の足らなさでつらい目に合わせたなあ」と妹の立場に立って気遣っている。また、妻に対して、A327「妻になんで惹かれたかという尊敬できる人だったから」と妻への尊敬を示し、A349「友達作ろうよ」「僕以外に頼れる人を作ったほうがいい」と妻の成長を願っている。家族に対しては、A139「家族に迷惑がかかるなあ」、A361「これ以上、負担をかけたらつらいかなあ」と家族への気遣いを示している。こうしたことも、いずれも愛の表れであると考えられる。

さらに、A289では、福祉関係の仕事を目指す人たちへの厳しい責任の愛を示している。「(自分の経験を話すことについて) こういう思いで今、話をしている、だから、今日のことをすごく大切にしてほしい」と成長を願う気持ちを表している。その背景には、A289「あなたたちが育てることになる」「あなたがお母さんになる」で示されている、施設の子どもたちへの気遣いがある。これは、自分の経験を話すことで、自分自身が傷つく可能性があるにもかかわらず、同じような困難を持つ子どもたちのために、人々に理解・成長してほしいという深い愛の表れであると考えられる。

加えて、Aさんは、A297で、施設を出た子どもたちのアフターケアについて、「育ててきた子どもを他の事業に任せるとするのはちょっと無責任」「その子の人となりを知っている職員がやるべき」と施設が果たすべき責任について述べ、「気軽に同じような境遇の人が集まって、愚痴が出てきたりやこうなんだよねと言えるような場」と困難を抱えた人たちの語り合える場の必要性について語るなど、苦しい人々へのいたわりの深い愛を示している。

3.4で見たように、Aさんは、A327「愛するとか、大切にするとかという感覚は薄いのかなと感じています」と、親密な感情を感じにくいという意味において「愛する」ことができないと自分自身をとらえているようであるが、実際は、Aさんは、これまで見てきたように、もっと本質的な豊かな愛を人々に与えてきている。

以上、パート③の施設を出てからのことについての語りの中の、Aさんが「愛してきた」ことを伝えるものを見てきた。最後に、3.5でAさんが「愛されてきた」軌跡を見てきたパート①とパート②の語りの中においても、Aさんは、自分では意識していなかったと思われるが、多くの人々から愛される中で、その人たちに愛を与えて

きたことが表れていると思われるところを見ていく。

まず、A29で見た、Aさんが病気の時に、自分の家においてくれたお姉さんとのエピソードは、筆者に様々なことを考えさせた。お姉さんは、自分を母親と間違えたAさんに「うちの部屋来る」と言ってくれ、Aさんが家に「入り浸る」ことを許していた。このお姉さんは、Aさんを助けていたわけだが、同時に、Aさんはこのお姉さんを助けていたのではないだろうか。何の義務もないのに、小学校に上がる前の年頃の男の子が家に来るのを許したお姉さんにとって、Aさんはどのような存在だったのだろうか。病気のAさんを家においてくれたり、果物をくれたりしたお姉さんは、Aさんの世話をすることを重要なことと考えていて、そのことを大切に思っていたのではないだろうか。Aさんの存在は、お姉さんの中に何か大切なもの、「愛」と言えるもの、例えば、フロムの言う「配慮」や「責任」のようなものを芽生えさせていたのではないだろうか。

そして、お姉さんの目からAさんを見てみた時、Aさんから愛を受けていたと筆者は感じた。お姉さんにとっては、懐いてくれる、かわいらしい、愛らしい存在だったのではないだろうか。AさんはA37「支えてもらった」だけではなく、お姉さんを慕って家に通うことで、愛を与えていたのではないかと。お姉さんは、Aさんから愛を受けることに応えて、愛を与え、そのことがそれだけでうれしかったのではないだろうか。そこには、双方向の愛があったのではないかと、筆者は考えた。

また、家族のようにしていた食堂の、大好きなお姉さんにも、ご飯を一緒に食べたり、歌を教えてもらったりするなどして、Aさんは愛を受け取るだけではなくて、愛を与えていたのではないだろうか。A29「お姉さんが好きで」「好きで好きで毎日行っていた」というように、慕ってくれるAさんをお姉さんの目から見た時に、愛らしい存在であったことが想像でき、お姉さんもAさんから喜びを受け取っていたと感じられる。その他、毎日通っておしゃべりをしていた食堂の人たち、勉強をマンツーマンで見てくれた施設の職員の人たち、音楽に誘ってくれた学校の先生、新しい学校で一人ぼっちのAさんの友達になってくれた友達、施設を出てから一緒に住んだ友達についても、これらの人々から様々な形の愛を受け取っていたAさんは、たとえ愛と意識することはなかったとしても、これらの人々の気持ちに応じて時間をもとに過ごし、楽しんだり、努力したり、ともに笑ったり泣いたりすることで、フロムの言う「自分の中に息づいているもの、喜び、興味、理解、知識、ユーモア、悲しみなどを与える」という意味で、人々に愛を与えていた

のではないかと筆者は考えた。

4. 考察

以上見てきたように、本研究は、児童養護施設経験者であるAさんの語りをディスコース分析の手法で分析し、その語りに表れているAさんの現実の見方(解釈)を明らかにした。分析の過程で、Aさんの語りは「愛する」ということがテーマになっていると考えられ、「愛する」という視点からAさんのディスコースを分析した結果、Aさんは自分の「愛」を巡る見方として、「愛されなかったので、愛せない」という解釈を述べていると思われた。

以下、4.1で、そのAさんの解釈について、糟屋(2012; 2014)に基づいて、ものごとの見方を作るのに大きな役割を果たすと考えられる、重みづけ・因果関係・登場人物の属性の3つの視点から検討し、Aさんの語りがどのような考え方の枠組みに基づいているのかについて考察する。そのうえで、4.2では、なぜAさんが4.1のような考え方の枠組みを持つことになっているのか、社会文化的要因と認知的要因を考察し、別の見方の可能性を検討する。4.3では、本研究のようなディスコース分析のカウンセリングにおける意義について考察する。

4.1.3 3つの視点からの考え方の枠組みの検討

3.4の分析で見たように、Aさんは、繰り返し、自分が愛のない生い立ちで、愛されなかったために、家族や周りの人々に親密な感情を持ってないなど、愛せないことを述べていて、「愛されなかったので、愛せない」というストーリー(現実の解釈)を持っていると考えられた。Aさんの持つ、「愛されなかったので、愛せない」という「愛」を巡る解釈を、前半の①「愛されなかった」という部分、後半の②「愛せない」という部分、①と②をつなぐ③「ので」という部分の3つの部分に分けたうえで、重みづけ・因果関係の設定・登場人物の属性の付与の3つの視点から考察する。

まず、前半の①「愛されなかった」という部分については、確かに、3.4で見たAさんの語りにあるように、親には十分愛されなかったのかもしれないし、施設の職員の人たちは親代わりのようにはなってくれなかったのかもしれない。しかし、3.5の分析で見たように、Aさんは「愛されていた」部分もある。しかし、「愛されなかった」ことが重みづけられて、「愛されていた」ことが軽く扱われている。また、後半の②「愛せない」という部分については、3.4で見たように、Aさんは人に対して親密な感情や愛着を持ちにくいという意味で「愛せない」ということはあるのかもしれない。しかし、3.6の分析

で見たように、「愛してきた」し、「愛せる」と考えられる。にもかかわらず、親密な感情を持つという意味での「愛する」ことが重みづけられて、フロムの言う「配慮」「責任」「尊重」「知」のような側面の「愛する」ことの重みづけが低くなっている。

こうした「愛」に対する重みづけの結果、これらの「愛」に関わる人々、Aさんを愛してきた人やAさんが愛してきた人々の属性が、今のAさんの存在にとって結びつきの弱いものとなっていると思われる。Aさんの語りには、これまでAさんを助けてくれた人々の話が数多く登場するが、その人たちが今のAさんの存在に影響を与えている属性を持つものとして扱われていない。Aさんの語りでは、幼い頃から成長する中でAさんを支えてきた人々が大きな存在であったことは認識されているが、その人たちが様々な形の愛を与えてきており、Aさん自身もこれらの人々に愛を与えてきた双方向の愛があった関係とはされていない。また、現在のAさんの行動や考え方・価値観に影響を与えているともとらえられていない。そのために、これらの人々が今現在のAさんにとって重要な意味を持つ存在としての属性を持つようになっていない。そして、これまでのAさんの人生の中で、Aさんが望んだり必要とした時に目の前にいてくれなかった人々(父親や母親)が今のAさんの存在に重要な意味を持つように重みづけられて、それぞれの時にAさんの目の前にいてAさんを愛してくれた人々、またAさんが愛してきた人々が重みづけされず、軽い意味しか持たない存在となっていると考えられる。

次に、③の「ので」という因果関係を表す部分を検討する。3.4で見たように、Aさんは、自分が愛されなかった生い立ちであったことが原因で、自分が愛せなくなっているという「愛されなかったので、愛せない」という因果関係を繰り返し述べている。しかし、先に検討したように、Aさんは、①「愛された」し、②「愛してきた」と言える。①と②の部分のつながりの言葉については、3.6で見たように、語りの中に表れている今のAさんの行動、例えば、福祉の仕事で困難を抱える人々を支えていることなどを見ると、「愛された」ことの痕跡や影響がAさんの行動に表れていると推測され、これは、Aさんが様々なところで愛を受けてきた「ので」、人を愛せる人間になっているという因果関係によるのかもしれない。だとすれば、Aさんは「愛されたので、愛せる」と言うこともできることになる。しかし、このことについて、Aさんは「愛されなかった」と「愛せない」ことを「ので」「から」のような因果関係を示す言葉で結びつけている一方で、「愛された」と「愛してきた」ことは

因果関係を表す言葉によって今の自分の存在に結びつけておらず、「愛された経験があるので愛せる、今の自分がある」という因果関係としてとらえていないように思われた。

こうした考え方の枠組みを意識し、検討してみると、Aさんの①「愛されなかった」、③「ので」、②「愛せない」という見方とは別の解釈の可能性をすることもできる。まず、①と②のうち②「愛せない」という部分については、3.6で見てきたようにAさんは「愛せる」のだとすれば、①と②をつなぐ言葉は、③「ので」という理由を表す言葉よりは、「けれども」という逆接の言葉でつなぐ方が適切であるように思われる。すなわち、「親からは十分に愛されなかったけれども、愛せる」と言うことができる。Aさんの語りの中の様々なエピソードが、自分の人生において「親には十分に愛されなかったけれど、愛せる」ことを示している。

さらに、③「ので」という理由を表すつなぎの言葉はそのままに、「愛されなかったので、愛せる」という部分もあるのかもしれない。Aさんは、親には十分に愛されず、深い苦しみを味わった。だからこそ、同じような状況の人々の気持ちを深く理解し、配慮することができる。そして、困難を抱えている人々を支えたいという気持ちを持つことができるということもあるかもしれない。このように、フロムが定義するように、「愛する」という言葉を、親密さということだけでなく、人間の実存に関わるような「配慮」「責任」「尊重」「知」という意味でとらえて、愛の重みづけ、愛に関わる人々の属性、愛を巡る因果関係を見直すことで別の見方（解釈）の可能性を探ることができる。

Aさんは、自分の現実のとらえ方、愛を巡る因果関係を、「ので」という言葉を使って「愛されなかった」とことと「愛せない」ことを結びつけることで表現している。ディスコース分析は、考え方が言葉に表れるだけでなく、言葉が考え方を作り出していく、言葉が「個人によって作り出されながら個人を作り上げる」（能智、2011、p.263）という立場に立っているが、その立場で、Aさんの現実の解釈や言葉を振り返ってみると、Aさんはこのような言葉を使うことで、自分のストーリーを構築し、そのことで自身の現実の見方を強化することになっていると考えられる。語りの言葉を振り返り、「愛されなかった」「愛された」「愛せない」「愛せる」というような要素を、どのような言葉でつないでいくかを見直す試みが、現実の新たな解釈を発見していくことにつながっていくと思われる。ホワイト（2007）が論じるように、ないがしろにされてきた大切な出来事を、人生のストーリーに

盛り込むことは、人生の別の見方への入り口を提供することになる。その結果、人生のストーリーが「厚みを増し、より深く歴史に根ざし」、大切な出来事が自分の現在の存在に結びつくことで、人生の問題や困難に主体的に積極的に対処しようとする基盤を作ることができると考えられる（p.54）。

以上、Aさんの語りから、何を重要とし、何を原因・結果と考えているか、人々にどのような属性を与えているかといった考え方の枠組みを見ることで、Aさんの現実の見方を検討した。Aさんがとらえている現実の解釈は、重みづけられた1つの側面に基づいており、実際には他の側面もあって、他の解釈も可能であると思われる。しかし、それがされていないために、Aさんは「愛されてこなかったので、愛することができない」という思いを持つことになっているのではないかと思われた。出来事の重みづけ・因果関係・人物の属性という考え方の枠組みを見直し、出来事を別の見方から見ることにより、自らの人生の肯定的な部分に目を向けたストーリーを構築する手がかりになると考えられる。

4.2 社会文化的・認知的な視点からの考え方の枠組みの検討

4.1では、Aさんの「愛されなかったので、愛せない」という解釈を作っていると考えられる、重みづけ・因果関係・人物の属性に関する考え方の枠組みを見てきた。では、Aさんはなぜ、このような考え方の枠組みを持つようになったのだろうか。その背景を社会文化的・認知的な側面から考察する。

まず、ディスコースの考え方の枠組みには、社会文化的背景が大きな影響を与えている（Fairclough, 2003）という立場に立って、社会文化的要因について考える。Aさんの語りには、「普通ではない」「一般の人と違う」といった普通とは違うことを意識した言葉や、「おやじの血を引いている」「母親の血が流れているから」「親の存在や血をすごく意識する」といった血縁を意識した言葉が繰り返し見られた。自分は普通とは違うという見方や、血縁を重視した見方は、Aさんの語りからだけではなく、養護施設出身者の語りに一般的に見られる考え方の傾向として言われていること（施設で育った子どもたちの語り）編集委員会、2012）と通じるものがある。内田（2011）が指摘するように、施設で育つ人々に対する社会の眼差しの多くがマイナス・イメージのものであり、そのため、彼らは同情・偏見・差別の対象になりがちである。また、日本の社会は「子どもの育ちと若者の生活を家族に依存する社会」であり、子どもの生活や育ちの責任は

親や家族が担うものであるということが当然のこととされているという指摘もある(西田, 2011, pp. 204-205)。このような、家族を中心とすることが当たり前という考えに基づいた社会文化の中で育つことで、親に育てられていないことで自分が普通でないと考えてことや、そうした親の子どもであることを強く意識するということがあるだろう。

次に、認知的要因を検討する。Aさんは、3.5 で見たように、様々な人々から様々な形の愛を受けていたが、それを重みづけしていないように思われた。「支えてくれる人はちょこちょこいたなあっていう感じです。やっぱり母親じゃあないです」や、「(施設の食堂は)料理の手伝いをしたりとか、話したりとか、唯一の逃げ場所だったですね。施設職員じゃなかったです」のように、支えてくれた人たちがいたことやそこに「愛」があったことよりも、それが、親や親代わりとなるべき施設の職員たちから与えられなかったことに焦点が合っているように感じられた。ゼックミスタ(1996)が指摘するように、人は出来事の原因が何かを特定する時に、そこに継続的に存在していたものよりも、新しく生じたものや、普通でない条件、「表面的に一番目につく」出来事を原因としてとらえやすいという傾向がある(p. 35)。こうした、ある条件を普通でなく、背景の文脈から浮き上がっている特別なものと認識すると、それを原因と考えるようになるという、人間の認知の仕方の傾向のために、重要なものが軽く扱われることがあると考えられる。確かに、Aさんは、親の育児放棄や施設での生活など厳しい環境で育ち、必要な時に家族に頼ることができないという非常に困難な状況に直面してきた。よって、Aさんが現実を見る時にそうした困難な状況に焦点が合い、現実の解釈が厳しいものになるのは当然とも言える。そうではあるが、先に述べたような人間の認知の傾向の影響を受けていることを意識し、それを見直すだけでも、新しい解釈の助けになることがあるのではないだろうか。

このように、重みづけ・因果関係・関連する人々の属性の設定などの考え方の枠組みが、Aさん個人の経験だけにに基づくものではなく、社会文化的要因や認知的要因の影響を受けていると考えれば、別の見方をするヒントになると思われる。現代社会では「愛する」ことは、親密な感情を持つことであるととらえられがちであるが、むしろ本質的な愛は、「配慮」「責任」「尊重」「知」の4つであると、フロムは指摘している。また、日本の社会は家族が第一であるという考えが強いが、実際は、家族以外の様々な要素があり、それらが多様な作用を与えている。人々がものごとを解釈する時に、「愛」つまり人間

の実存に関わる問題や、家族の問題についての社会文化的な考えの影響を受けていることを意識すれば、周りにあるかもしれない価値のあるものや人々を改めて重みづけし直したり、今の自分の存在に結びつけて考えることが可能になるのではないかと。また、人間の認知的傾向を知ることで、目立ったことを唯一の原因としてとらえがちであるということを意識し、これまで見逃してきたことに気づき、自分の人生のストーリーに取り入れていくことができるのではないだろうか。

本研究が分析した語りは、児童養護施設で育ったAさんのものである。しかし、家族の中で育っても、Aさんと同じように、愛されていると感じることができず、そのために愛することができずと感じている人は多くいるのではないだろうか。多くの人々が、自分の生きる社会文化で当たり前とされているものを自分が持っていないことを強く意識し、そのために、自分が受けていたり、与えている愛を十分に感じる事ができず、また、自分の中にある愛の可能性に気づかずに孤立を感じているのではないだろうか。また、ふと気づく愛があっても、それを重みづけることがなかったり、自分の存在に結びつけられていなかったりしているのではないだろうか。Aさんの語りの分析をしながら、筆者も、自分自身や自分の周りにある愛に、十分気づいているだろうかと振り返ってみることが何度もあった。私たちが生きるうえでの重要な課題の1つが愛であることを改めて振り返り、1つ1つは小さなものかもしれないが、自分の中や自分の周りにある愛を探し、見つけだし、重みづけ、自分の存在に結びつけて考える姿勢を持つことが大事であると思われる。

4.3 心理臨床(カウンセリング)におけるディスコース分析の意義

本研究でディスコース分析を行なった語りのデータは、2.2「分析データ」で述べたように、児童養護施設経験者を支援するために、児童養護施設経験者の経験や心理について理解を深め、心理臨床的アプローチを探ることを目的に収集されたものである。そこで、最後に、本研究のようなディスコース分析が、心理臨床、具体的には、カウンセリングの過程にとってどのような意義があるか、その可能性を考察したい。

通常、カウンセリングを行なうときは、本研究のようなディスコース分析による言語の微細な検討が行なわれない。カウンセリングは、クライアントとの対話の中で、カウンセラーがクライアントの語りを理解して進んでいく。そこで、本研究のような言語分析を行なった場合、

カウンセリングによる理解と同じことがわかるかもしれないし、カウンセリングによる理解とは異なることが出てくるかもしれない。

ディスコース分析の結果、カウンセリングによるクライアントの語りの理解と言語分析の結果が一致していた場合は、カウンセラーの解釈の根拠が明確になるという意義があると考えられる。スクリプトによる言語の細かい分析のデータがあるので、なぜ、カウンセラーによる解釈が妥当だと言えるのか、根拠を明確にすることができるであろう。また、言語的要素を詳細に見ることで、さらに細かく理解できることもあるかもしれない。

一方、ディスコース分析の結果、カウンセリングによる理解とは矛盾することが出てきたり、カウンセリングによる理解に追加して新しいことが出てきた場合には、より深い理解の手がかりとすることができるであろう。カウンセリングによる理解とは矛盾することが出てきたら、なぜそのようなことが出てくるのか考えることで、その矛盾を解消するような、より広い理解に到達できるかもしれない。また、新しいことが出てきた場合は、まだカウンセラーが気づいていないことがある可能性に気づくことができると考えられる。

言語分析の具体的な方法としては、例えば、本分析で行なったように、接続詞に注目して見ることで、クライアントの事実の結びつけ方について検討することができる。クライアントが「ので」で結びつける事実のみ注目しているとき、「けれども」で結びつけられる事実があるにもかかわらず、クライアントはそのような結びつけ方をしていないということを発見することができるであろう。

このようなディスコース分析は、カウンセラーが自分で行なうこともできるし、クライアントには会っていない第三者が行なうこともできるであろう。本分析のように、直接クライアントに会っていない人がディスコース分析を行なうことで、他の情報からの影響を受けない状態で、言語のみを見ることから、クライアント本人やカウンセラーが気づいていない、矛盾することや新しいことなどが発見しやすくなるということもあるかもしれない。カウンセラーの仲間同士で、他のカウンセラーがディスコース分析をやってみて、その結果を、クライアントを担当しているカウンセラーが参考にすると、という使い方もできるであろう。

5. むすび

本研究は、児童養護施設経験者である A さんの語りをディスコース分析の手法で分析し、その語りに表れてい

る A さんの現実の見方（解釈）を明らかにした。そのうえで、ものごとについての考え方を作る時に重要な役割を果たす、重みづけ・因果関係の設定・人物の属性の 3 つの視点から A さんの考え方の枠組みを検討した。分析の過程で、A さんの語りは「愛する」ということがテーマになっており、A さんは自分の「愛」を巡る見方として、「愛されなかったので、愛せない」という解釈を述べていると考えられた。しかし、A さんがとらえている現実の解釈は、重みづけられた 1 つの側面に基づいており、実際には他の側面もあって、「愛されたので、愛せる」という別の解釈も可能であると思われた。出来事の重みづけ・因果関係・人物の属性という考え方の枠組みを見直すことで、出来事を別の見方から見る手がかりになると考えられた。また、このような考え方の枠組みは、A さん個人の経験だけに基づくものではなく、社会文化的要因や認知的要因の影響を受けて作られたものではないかと推測された。こうした要因がものごとの解釈に影響していることを意識すれば、周りにあるかもしれない価値のあるものや人々を重みづけし直したり、今の自分の存在に結びつけて考えることで、人生の肯定的な部分に目を向けたストーリーを構築する手がかりになると考えられた。

最後に 4.3 で、本研究のようなディスコース分析がカウンセリングに貢献できる可能性について述べたが、実際にカウンセラーがカウンセリングにディスコース分析を取り入れようとした場合、具体的な手法についての知識が必要となるであろう。そうしたことから、本分析の手順が少しでも伝わるように、3.1 で「本分析の手順と、気づきの経緯」について簡単に述べた。しかし、どのような視点で、どのような手順を踏んで、A さんの考え方の枠組みを明らかにしていったか、判断の材料となるものをどうやってテキストから見つけていったかなどは十分に述べていない。その具体的な分析のプロセスを整理し、提示することを今後の課題としたい。

本研究は JSPS 科研費 16K02606 の助成を受けたものである。本研究の一部は日本質的心理学会第 14 回大会（2017 年 9 月）で発表した。

謝辞

本研究のインタビューに答え、ご自身の経験について語って下さった A さんに深く感謝します。

引用文献

- Fairclough, Norman (2003). *Analysing Discourse: Textual Analysis for Social Research*. London: Routledge.
- フロム, エーリッヒ (1991). 『愛するということ』 鈴木晶訳 東京: 紀伊國屋書店 (Fromm, Erich (1956). *The Art of Loving*. New York: Harper Collins Publishers.)
- 糟屋美千子 (2012). 「テレビニュースのディスコースによる考え方の枠組みの構築—「全国一斉休漁」のニュースの事例から—」『社会言語科学』 14(2), 31-44.
- 糟屋美千子 (2014). 「テレビニュースは人々の抗議行動をどう描いたか—沖縄普天間基地移設計画に伴う環境影響評価書提出に関するニュースのディスコース分析—」 『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』 16, 23-38.
- 西田芳正 (2011). 「家族依存社会、社会的排除と児童養護施設」西田芳正 (編)『児童養護施設と社会的排除—家族依存社会の臨界』 pp. 197-206. 東京: 解放出版社
- 能智正博 (2011). 『質的研究法』 東京: 東京大学出版会
「施設で育った子どもたちの語り」編集委員会 (編)
(2012). 『施設で育った子どもたちの語り』 東京: 明石書店
- 鈴木聡志 (2007). 『会話分析・ディスコース分析—ことばの織りなす世界を読み解く』 東京: 新曜社
- 内田龍史 (2011). 「児童養護施設生活者／経験者のアイデンティティ問題」西田芳正 (編)『児童養護施設と社会的排除—家族依存社会の臨界』 pp.158-177. 東京: 解放出版社
- ホワイト, マイケル (2009). 『ナラティブ実践地図』 小森康永・奥野光訳 東京: 金剛出版 (White, Michael (2007). *Maps of Narrative Practice*. London: W.W. Norton & Company.)
- ゼックミスタ, ユージン B. & ジョンソン, ジェームス E. (1996). 『クリティカルシンキング 入門編』 宮元博章・道田泰司・谷口高士・菊池聡訳 京都: 北大路書房 (Zechmeister, Eugene B. & Johnson, James E. (1992). *Critical Thinking: A Functional Approach*. Belmont: Thompson Brooks Cole Publishing Co.)

(平成30年9月28日受付)